



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

謹賀新年

「三人の聖者 ラーマクリシュナ②」

西インドを旅していたとき、わが輩は東のベンガル人に間違われたことがあった。ベンガル人にベンガル語で地理を訊ねられた。

「ノー、おいらはジャパニーズだ」

鼻が高く肌が白いアーリヤ人が東漸すると混血が進んだ。見たことないけど、お尻に蒙古斑があるベンガル人もいるので、われらと同じモンゴロイドと混血したのであろう。

だから、あながちオヤジに似ていると付託しても間違いではないだろう。

南インドの厳格なバラモンは肉魚を食べない。それどころか、お土産の饅頭にわずかな玉子が含まれているだけで、突き帰された経験がある。

ところが、ベンガルのバラモンは魚を食べる。ベンガル人にとって「魚は野菜だ」と南インドのバラモンは揶揄する。だから生活規範はゆるいと思われるかもしれないが、そうでもない。

一つエピソードを紹介しておこう。

村にはダニー・カマリニ祠堂がある。赤子を膝に抱く母と子の像のように見える。なんとも微笑ましい母子像ではないか。実は母らしき女性ダニーは、ラーマクリシュナが生まれたときの産婆である。もちろん赤子はラーマクリシュナである。鍛冶屋の娘ともあるが、いずれにしてもダニーは低い身分の出自である。ダニーはことのほか少年を可愛がったにちがいない。

「ぼっちゃん。あんたがバラモンの証である聖なる肩紐を身につける儀式のとき、何かプレゼントをさせておくれ」

少年は聖紐式(9歳)のとき、お祝いを受けると約束した。ところが長男が猛反対した。最高位のバラモンが低いカーストから供物を受け取ることは穢れであった。だが少年は約束を守ると言い張った。

結局長男を諭す者が仲裁して、供物を受け取ることができた。その他にも類似の物語がある。

これらのエピソードをもってラーマクリシュナがカーストを「制度」として否定した、とわが輩は思わない。

しばしば忘我(平等の境地)に至った彼にとって、神だけが実在で、流れゆく「社会」は

幻のようなものであった。さりとして、目の前の農村社会には貧しき人々が群がっていた。餓死寸前のバラモンにとっても、魚は「野菜」のように映ったのかもしれない。

かくして、ラーマクリシュナは説く。

「貧しい人に神を説いてはいけない。まずパンを与えよ」と。

(ごもつともだ)

読者諸氏の皆様

いつもご愛読頂きありがとうございます。本年も宜しく願い申し上げます。